

911.8

八

俳諧論

よしふる

雜誌論

橋のよしゆる

美行の妻のゆきをうりせば。打ひあらと
のとくす。ハ。生の患ひ。徳がよば。凡そ
うちかれど。歎のと。ゆき。は。是
が古今れ原か。えり。げく。は。もの。ゆく
素。生と。ゆき。も。ゆく。は。ゆく。ま
と。ゆく。は。ゆく。ま。

け。されど、少くのことはへりて、とぞか
り。どうも、能賞のうしも、文物も、國雅こくがも、古事記も
等おのともは、すまされ。ひととじやして、あらゆる
機集きしゆと、なんふ、がんがんも、後拾ごしり、遠とほり、原はらくふ
がんがんくね、おれを、物ものからり、星やつ移うつて
いゆうに、とせ、ざるをひ。とくとく、人ひとを
もりく、小ちいかちいき、むりく、小ちいさくと、まわる
まわる、小ちいかちいき、ばらのこ、定家じょうけいか、いあらわ

國雅こくが也、はくら、と、附つきの、固和歌こわかと、想おもひく、も
たまう、たまう、も、知しるしあり、と、通とお席せき復ふく闇くろ流りゅうの、敵てき
うちて、國雅こくがいもと、がく、と、の、と、の、れ、法ほう出だて
古いえは、紫しかくら、志しあらがゆ、ふみを、ド、ゆう
ア、モリ、と、やなひけん、と、歌うたと、よ
りのいと、ひの、ひの、ふつ、歌うたと、よ
歌うたと、ゆ、を、ふせ、ぶ、ふき、うん、か、ば、と、そ
り、と、真ま、と、ま、と、ふ、家いえ、旅たび、附つきと、よ、ま、よ

南國のものぢりかうにまく。朝人の波
もどゆきぬゑふ。われども。安文は伊豆
城。また。毛坂の關ハ。毛坂をと。業平がす。毛坂
連哥の娘。毛坂をと。ふるく。黄おり。毛坂
の。れぞ。いや。すりあり。と。まのと
毛の。毛の。むかひ。もかひ。と。あらた。あたえ
ぬ。み。毛。方。別。あ。ふ。ほ。だ。り。ぬ。機。築。の。す。ふ
り。り。そ。お。け。法。師。と。よ。も。わ。さ。と。ゆ。う。が。

連。う。ハ。和。か。め。た。う。下。す。お。ば。か。れ。下。う。か。ま。
す。る。お。も。脚。岸。ま。の。う。う。び。き。す。と。も。う。卒。
ゑ。う。じ。あ。皆。」と。と。み。奈。り。て。い。ぬ。う。ぞ。ぬ。ぬ。ま
け。と。持。れ。わ。ま。ハ。じ。と。と。み。奈。り。て。い。ぬ。う。ぞ。ぬ。ぬ。ま
鋼。圓。の。ゆ。ふ。ま。の。雅。ア。ね。ば。く。高。ヒ。萬。燐
す。今。ま。ま。ば。乃。う。は。り。ゆ。と。ま。の。ゆ。う。と。萬。
リ。ひ。く。た。か。げ。と。ソ。お。萬。と。り。と。わ。び。く
く。お。萬。と。ソ。お。萬。と。り。と。わ。び。く

ちもあくまでも御備の筋といふべし。僧
正遍照院はすがりとて、唐から人をうけ取る
よし。あれらをうとへば、いづぞすかん
や。えびのとせり。一瓣乃圓潤とうべど
是ゆくさのゆべ。そきひあくは和氣柔色
その意のとる雅うれば有利。能因法師もが
長徳と仰せられ。かくの御墨紙かまくらに
ハ行くとすがりて。かくのものも能く成る。

よ。すばるあれらをうとくえバ。いそぞすかたん
や。すばるのよせすう。一船乃御園とうひま
是れ。君のゆべ。ときはすゑハ和葉園也
そのをのよ。素雅なればうれ。能園御所もが
長能と仰ゆ。あく海苔紙かみえす。ばり
行くとすばく。ひやくのとおれす。ばり

あら。春暮をいれ。櫻院とす。やぢらば。ゆ
がふ化日丸の船の。ゆく成のを。じつ。ト駿の人
毛。そばの。雅から。嘆められ。め。ほきと
ぞ。今。の世の。今。よしんを。ね。が。と
が。禁かり。しのの。御院。俗處と。雅かに
せ。れ。わ。え。か。も。も。あ。ふ。は。ら。す。だ。乃
代。す。ぐ。ね。の。ま。の。う。く。を。ど。と。が。ま。の。お
す。ぐ。も。う。す。う。く。れ。ど。す。ぐ。お。が。り。と。と。

ソシテモアレド・兼ねもアセマツトス。云
ムトカタジケルトガシバアホモシナリトハキモ
ハシメテヨリタリナシタリトモシトス。
シモアリヒカトゾモキモアリトガタリ。
タリタリナシタリトモシトス。

りもこればかりの事あつたる世の中
可ながれをも内亂難情の爲めより
まことにあれば、何よりはるかに其を
あらわすべく、ひそかに紙とんじ候拂う
て後の諸抄。これを解せしのまゝ、さういふ
と解説へたるは、恐れ入るを知らずと考へ
とあらず。とまづりとありて、世にとて書て
うけり。とへきとくとてあげとばのせり

人常に向ひて教へ日と小夜。はのふ一派の
経圓す。生ど。死ど。佛縫とよ。名と。冥集
の佛縫。奇と。り。もと。かと。その。ゆ。ま。奇と。く
ト。く。り。圓。吟。主。あ。く。の。街。く。と。禁。禪。理
と。く。ま。じ。圓。德。芭。蕉。そ。の。家。つ。と。す。甚。角
角。ま。と。う。そ。み。そ。の。風。と。ま。と。び。て。せ。
せ。後。さ。う。ひ。ふ。今。ふ。ひ。う。と。ハ。教。都。ふ。き。そ。り。取
事。ふ。法。素。生。と。文。物。の。そ。ん。下。も。れ。め。ひ。て。い

かくはひじのくわきのとそよすのあすは
は半弓のりゑ人のまよとばらむとよやう
う。ゆうに芭蕉が機はくじけんを全う
きの成りあうふがまも子病呻吟へして、
風流とされはまざれりあはれ。甚人
素饅食の庸人むねづらの滑稽の内をよみす。只
秋の遊化か感ト。折ふゆと附づき事。
即ちふるふ草くとせり。避諱おがた

とよもつまうて。うそんの中芭生源のあは。
やせら枝をじゆーはせど。旅をかのの
耳附れりたゞくまう。主殿をう辞す方のみ
全すばづれも。主物申吟すほど。佛讃ともも
あゆんでる人のゆきとくべ。教石すがのう。
ゆりぬきのうづふげと座する。ゆきの他
えふき。和歌本と連歌とをまき。處
て俳諧とを。氣運の變化と。風流のむら。

御呼うねに余。されど佛諧とを。サマスカヌ
ま三時。無からそり。すも。佛かう。御呼
御詠す。の民。喜びて。その風を。そとも。有る
者。の。情かう。と。喜び。そも。うらやまひ。と。有る
ある。そも。うらやまし。喜び。そも。うらやまひ。と。有る
に。ハナの。うらやま。あり。あげ。え。うらや
ゆうれ。うの川。ながれて。うらやま。うらやま

耳聞りれりづくまう。主殿をう辞したのみ
今すばづれも。主徳申吟す経じ。佛縁とも
あゆんとる人のゆきとゆび。数石すがのゆら。
ゆり風きみのよづかはじと座するゆえ。お地
主ふまづ。和歌奉て連歌となります。お慶
て佛縁とくふ。氣運の變化り肉流のゆら。

寺
峰すわにたるれど佛縁とく。サマスカヌ
ま三時り無からそり。即ち佛か。御事
難解す。民喜むと。その風をも。下れる
安の。情ふくらむと。またむらむと。ひどい。
あると。まうひもじ。もつてむらむと。ひどい。
にまうひの。うつ。まのあげ。もまうひ
ゆく。うちの川のまうれと。まうひと。ひどい。
ゆく。まうひと。まのや。おげ。まん

わ後よりもりりとん。なんじくさんじをとり
なまへたまへしはうねはいぞかの「ふすゆ」
用よとたがひゆきしよてあざまの牛棟かゑだ
えんやうあうがいん
玄峯集。麦林集。みだり集。うえす。あざて。ばくせ
経が風俗文選をどナドへる事に。貞徳御講
経御のと解せん。麦林は氣勢をふらう。お
冥ふうして其角うつむかひや。漫談又傳
十牛。神をめぐの確云。まくか汗するのみ。ばつ

べる人見るゝて坐廻と湯です。彼人され云せ
きものをばらぬく近遠の事の多くものもあ
て。巧拙ともども其角が夕よ
梅うめやとも食乃まもんのどうぞ
もてうめうめや根ねねひて奥どもを
かくすれきのくまく身自どもかくす
もやさん。史傳語の事史紀の滑稽集、出で。日
本紀本傳語の事史紀の滑稽集、出で。日

さハたまく成る。ねはいでかうの。ふすり
とたがゆきひろく。あやめをすり牛棟かもえだ
やうすりん。みえ集。うり金。かづくら。ひな
峯集。麦林集。みえ集。うり金。かづくら。ひな
が風俗文選。すどすどへとる。に。貞祐。徳清乃

おもひて書く事あへず。かくのうじで。た
しむとぞ。とくに。しゆゆりをす
まことひ文字をと。あやがく教訓と書く。
國蕃論す。まちづけ。古今集小説論す。此
二説は俳の物であり。筆書の如きす。まことひ
一とす。まことに。古今集の俳詔す。まことひ
まことひ。まことに。古今集の物を俳諧す。まことひ

むかひかひ。一。和可れは家既にそぞくすりて、お
りき來とよすすみのうり。極乃くかよふと
えられうづひすとよすり。とてどまゆべり
をんじく徴ひ。女郎元の家もすすらは。花と
さくや葉せつうとて。河かがりゆく。草と一壁セ
ひ。しづきの雅すのやう。とてかくさんとづれ
ゑた。にまのと。ごきり。とちの風流を。左
あきえほけをと。あくすれり。とひがい

あり。中古のわすとひづぬとあらわめ。今まふ
古今集比俳諧序とひげてえバ

枕うち跡うちゑのせをもどせんかまぞ床ゆかむ

家後うちアののせをもくすに跡とがくいす

御代と人とれとぬきよやうがまよへ我とねぬ
風吟雅ばすとてかくとあり

車のやせうなびとあまきくび涼き谷を流くらる

俳諧の名是をやうへかく。吟詠すと性情

の説とくすまのうちゆふとばかくかく
されを實ふとせざりにはれく近接はとびや
鬼神をかんせしゆふりてばれみのゆとりづと
のあひへもえの形をもとめうれず
ろくすとくすなり。志るゆふ俳諧乃ゑの實
つゆをうへてくまみゆみゆうればうり。ひの
情をあみのまこととゆふせばうり。か
く詠酒のまげい。御代すとて徳安すとゆ

誠のつゝにゆびをさへや。おとへはれ
たのび。速はやすかわがよ。たゞの素すこだ。まう
まうまうあらむ。たゞのつま

筆の文也 機巧もいゝ君せ般たり。那 芳樹
をひどやう神ふなりてゆくこぢにせよん能
諦の風神とてゆきふ云れ。 トツタ
そよぎふみかく りびやうきよ
かまど商人乃とて夜すとといふ事わへし。 トツタ

いれど俳諧の達人たれども、いざと
渾沌^{いり}かくて是處^{じよ}はりしるべくと、體本^{てうもん}をもて
有^あらまへらず、そぞれ柳^{やなぎ}と松^{まつ}毛^けす
根^ねあんや。和^わ音^{おと}を雜^{まじ}語^ごすほ、空^{うつ}虚^きとひ俳^{はい}
諧^{かず}ハ俗^{ぞく}諺^{こと}と、達^{たつ}笑^{わら}ばのふ、モ^も少^{すこ}少^{すこ}俳^{はい}本^{もと}、
の柄^{つか}。杞^き柳^{やなぎ}をうけよのふはくふまよ。
劉^{りゅう}矣^えと、身^みと、命^{みの}と、の、自^じ我^がが、世^よ上^{じよう}乃^な
居^ゐ。はまゆと、體^{たい}。無^む事^ごと、詠^よ歌^か。

さうしておまかせだつて、
筆のよや機ともいふが

七

車のうや機ともいひては牧きり水 范樹
などかる種ふたりとゆへぢに世もん能
端の扇形をか云ル。 トツタ
をかくふまかく ひびきあがめ
都もど南人へとし後まづひく風かへとく

はを俳諧の達人たる所であつたと
いふ。併せて、當時は、いわゆる「煙草」をもて
てゐる所であつた。それで、それと並んで、
おもんや、和菴を俳諧などは、宣傳といひ、俳
諧の俗諺などは、詠笑ばかりでなく、小説本、小奇
の物、杞柳をうけたもの、ふくらみ、ふくらみ、
劉東洋の如き、その他の、自作本が、世にあ
れる。ほんのと筋書、無小字にて詠笑本。

奇言妙語ひんごひんごひんごひんごひんご
芭翁のぐくとあへど艶麗とすふもん。すま
そめん概とす。うてにまよ和す。折襟な
今ありて俳諧ふ古今ノヨリのものばかり
けよばく。そのをうめととのをのむのとば。
がぞがぞとのん。和歌今のかくもれてあら
ばよほとくしを參め巧松唯。まよひのう
おとおのうづかりゆく。あらもあらもうつぶ

えすさんざい。ひよみ、二世俳諧師
をもとて歌家と教訓。家唱などれぞ。跡乃
まよひの遠ゆき。極率の理義を咸とく。ひ
かうて。實様ぶりの無小計。ゆゑと又うか
のうすふそのふたゆねか。す
感吟句をひそひそひそひそひそひそひそ
室暖火あひ温湯火。とおせん。和琴小計
か。市中也戯言一時乃後著といふるひ

まもだく。而の。取引あらず小腰と
こぶつけて、おもはり漏れど、詮義はくしまる
と真の俳諧。おまうをぞめ。おひよの流
としゑを室ふせむ。俳諧の原より。お
まうと連方脚。おまう。おまう。おまう
おまう。おまう。おまう。おまう。
おまうとおまうの難しきえ。おまう。おまう
て俳諧の原より。おまう。おまう。

徳はさうありとみて。その人を情のうとむかふ。
もろゆゑ此の良徳あれ。がんせひ
まくらに。まくらのやまとすも右徳の右手と見て。
人やまよて。ごとく。識乃そよが生がゆて。ト
徳の賜たりとぞえり。佛徳。流のうを海也。
かづく。流のうをうて。まれどさゞてし
けれど。かづく。かづく。また。二旅か。海す。ばげ
まも世の人の事あき。すくまづりとまもえし

たるゆきまくらもとへは先て。又家

北名ハ寒羅牛刀のこりもゆん

スハヨモミ

俳諧連句辭

若作や春丸御みはすよもよど

麦林

すりぬ林ふのすて晴ふう

麦林

いすもひをか月のすけうり

麦林

收帳記へ走まくちー一のま

麦林

秋月やたりも常れおすきに代

麦林

ねく詠へるやうんをばあ

麦林

えのうぬるうもひとすづ

麦林

馬きぬま牛を夕日の小走れ

麦林

春御のまめい乃樹やこのの月

其角

雲拂へ人紙休り月えんく角

其角

いづげすれ語とゆすや水の

花すの身まくらひし紅柳れ

ひ由

とあげておひる。二番小玉やへ今井糸玉條也
れおゆく。おもろんも。一筋先づて。又おゆく

此名ハ割羅牛刀の事也。又云
スハヨリモテ

仰瞻遠奇勝

若竹や暮れたりハすゞもど
すトシ食林かのむ」と晴れ
ゆすミタウカノスナケリ
收帳^{アラシ}トキニ^{アラシ}の事
麦林

月や六日も常めおとせに
れり詠る事やうんを當て
まつてゐるもひとすが
馬をぬき牛を夕日のかゝれ
御のまゐる様やこの月
雲がく人紙体り月えり角
いづれ此語をゆくや水の
花の身をうひし柳れ

あまきくくくくから元のよだよ

真室

黒きふとの名ふよ花乃よぞうゆ

淡室

ゆく秋のむくとばとくまめ

麦林

蝶の名むかうり莖中みひ度哉

麦林

角ぐるやさよば鹿ふねる邊

麦林

むはづき角アリヤセ鳴牛

麦林

唐崎やよしやあうりむりの名

麦林

うごのとの近所アリウツ林

麦林

唐の名のよしよみ小林

麦林

麻の名のよしよみ小林

麦林

アカモヒコモヒコモヒコモヒコモヒ

麦林

めうれぬ山へましやんもよき

漢文

すまぐくか葉のやのながくもが
かみん

芭蕉

経政のまさんふくみかづみ

漢文

アリあひうちむらわゆ一秋のよ

芭蕉

毛却川被ふ乳母の島

芭蕉

はだく風流をすきスレ御了と風潤りとも

芭翁

かほほしにれどまかき秋うり下る舞坐をナキま

芭翁

とじゅうゆく下北角兵衛もひなみり乞ふの俳諧

芭翁

七言の音奇難くも難解のまんと強すも難解
難解成歩くま生の志と殊が景
河口の歌をかうんじまん度のやうのよおず歌
主とてすんハ霜震ひたゞひねく。いじのよおず
音は二とす。かうり一とす。とす。かうのぬ連。
手とひす。にゆは。歌をかうす。お一音と
れえはとより。かじりと。体解ひす。人を
感動せしむと。空鏡の鏡ゆきす。や。をとだ

芭翁

らどりてお入ます。旅宿等へもんがとをす

もえぢんぞ用潤のめふへん。和歌のよひと
かきとく。其角がみえ集み

川もひのものがぬ浦へはまくまく

そまくまくはぬ浦す。情ひ和奇かむく。うねよ。とハ

此鄙池と。捨浦と。多岐市中。の俗ふまむ。金す
きぬ浦流と。すずらん。よはた。咲あ。咲乃
舟ぞのよもよとよみーと。月鳴。さくはづ。そし

と。朝のよひのよろと。ぎ。雨をと。霞のむけ

と。繼経の流。すと。うすと。ゆふすと。ゆふと。

真の俳諧

野へ持くさうひの元も日折の角

淡木

せひもさげゆくゆゆかー。水年

陸琳

しげ山ハ秋のとくりてくらむれー

淡翁

ゆふい。ゆくゆくねこ。嘆じうの病

淡翁

う。成トふくふれだす。と

淡翁

かを乞ふ。其角が見え集ま

川むひもが空浦ヤハシマツカ（アリマツカ）

不思議す。波瀬す。情へ和寄か。一ノ内也。とば

此鄙地ヒコチ。松瀬マツシマ。市中シチヂの俗ソク。多々タダ。多々タダ。
魚流ウナギリ。す。うん。よ。是シテ。唯タダ。限リ。限リ。
鳥トリの。よ。と。月カムイ。鳴カムイ。と。は。す。そ。

と。勲スル。の。と。り。と。ぎ。と。か。と。ま。と。ま。の。智。

と。鄉カミ。俗カミ。す。ま。と。り。万マニ。

真の俳拾

野ノ。桔ク。さ。の。元モ。日ヒ。把ハ。角カツカ（水年ミヅシマ）
せ。の。と。び。ゆ。の。角カツカ（水年ミヅシマ）
と。げ。と。秋ヒ。の。く。り。と。く。ら。も。れ。

波ハ。浦ハ。ふ。れ。花ハ。ア。ス。花ハ。ア。ス。

徒ハ。志ハ。

鶴嶺やとびかどてもえの枝

淡翁

うぐのまの假も筆あらわのむ

淡翁

食うと死ぬけよと見えず岸のく

淡翁

けり鷺鷺を疏い岸のま秋ともぬ感のべり

淡翁

とすきうり川をいづ。室暖候候もゆるゆす。

淡翁

白雲を浮遊ふたりて岸のまくゆあはるす

淡翁

て。まごのまゆるりと見る見はた。解ひ

淡翁

かのゆのゆうとすねば晴あ

淡翁

うりとおきふはもぬちきが

淡翁

草ふれよハ森のつみみく角

淡翁

ほりや月のとくぬのう

淡翁

蝶々やふるもどふもううむのう

淡翁

梅うハナひ日ううれなれなれ

淡翁

淋一見廉をかくふ等上手

淡翁

仲人のうそはまむむる勝氣

淡翁

はまくらや行ゆわしきて中

淡翁

すすり鳥はもとからか
ちうごくへ風をまわすがゆふ
其角

レレトモミハシガスドニシテシテ
香草散大が種ナリトモモル事
御内子れふとトヤナガニ御麻衣
モジクシタモリリリリリリリ
アーナシノ種ナリシテシテ
草木也ハシムラ鴨分ナリ
其角

其角

漢書

崇因

月すり残りと仕事などり那
をうきのまへり

後編

もとより少く猶乃
か

卷之三

所と今より様子をうかがひ
たゞ其俳諧と歌人の風調

至るく又はノホシタニ奇ニシテ

君かうふえばなり。猶まハシマ却カクばれば徳勝小罪と因ウツ

俳諧の白原

まむてうへう河めみや秋乃もま

漢文

名月や山とあづてよまとど

芭蕉

うすら乃難ノ一ばくごひまこ

芭蕉

せは抜ノ馬をましま、郭云

芭蕉

まきせば、御じまでまとバ次局の終

芭蕉

枯枝ふ鳥のうゆりうり秋のくれ

芭蕉

三井ものつをくうぞやまの舟

芭蕉

けねく一反吟どと嘔囁すゑむぎむれ

芭蕉

共角

共角

いの日や、ねれど、ぬのいの

其角

けい秋元ふともみ波すをとねえ

其角

寝入や、もゆの小波くをほゝえ

其角

、がともむくの姿階かすます

芭蕉

松原のすだりとくとくとくとくとく

芭蕉

、うすかからへりひすとおおおお

芭蕉

山里は万葉かそー、拂乃木耶

芭蕉

抑あそはみをうがひすれ

其扇

なかのまほとよかう浅あう

不器

我あそもあそびにまわる

其扇

やまとつまむとねすと人情なまき

虚をよて、風流とく雅殿をまえく用ひ雅

情ふくば、やゆたとあそびにすら意地

廢の氣すきの角へたり

麦林

見るもすくいはせめすと紙ひが

後篇

紙難のとくぐくすまえとくぐく

其扇

そのあくと猿毛小義波にけり

不器

もつ年やほい柳より木のぬ

不器

もつ年小さつひのひりしゆ

不器

虚をよて、風流とく雅殿をまえく用ひ雅

不器

見年やほい柳より木のぬ

不器

其角

よだらや法華しけもしゆみど堂
上まほどをも優れたり解かう

其角

ゆめいや桂とびし水のむす

その代

かく紋めうりとて、その人とも解得あ流もも
嘆義す。ゆめいや桂とびし水のむす
の處も。で今川流雅士乃就景かて、吟詠む
多う。家鏡まゆりげくやそびく家鏡
用房が御とひするり。家鏡は小ゆうなど

ねまへれど、ひきもとふも、ひいて順平の
鄙云うれに、達者ふらばひゆり。因縁の感詠と
すとぞ。ひきもとふも、ひいて順平の感詠と
うんづまくも

かくゆにひがひて淋一に桂の節

は、ドウふすらよりの方とおの御縁ふおとこは序

月が年も

ゆきゆきとくもとくもぐる

又のまことよきのくとひの詠歌をあらう

達の素ふとんじひつうすよ

間間すゑあくちへ、胸ひ一回の傷り

ゆふ、裁めせば大孤くせよ。又の御乃

かかせとわらひて、一財と判へたかすす

衰えり墓所の墓碑にツ附ふ。喪金

かんおどり頭も脚へよしんでり。麦林

かねぐきれふ月やがて候。喪金

夏秋や兵士がゆだり。喪金

あきや

あき

其角

いの日やゆきもくのよ様もうひ

其角

うきて様の進むるよは

其角

まほのほくほくほくほく

其角

は風雨もひれり、生てよく宝鏡をのす。

其角

そと云はのちまくか志げく。松の木のちり

うせぐて、寝のまゆのねづりゆきがふ然

方化げうす。かくはうす。うすらゆき

其角

俳諧の如きをもすとあらむ。元和
も言ふ事も雅俗どもあらず。へり代きて學
べ。されど亦章ふうんせし。詠集をすへる
が如か俳諧より。にては景物と風流の成る所
より。札幅乃もそのやうにアヒのよきもあれ。

いづくらまくも。しうも。き病呻吟をもん。
三痴の狂歌歌味せば。宝珠もすと不用多矣
出くわづくは降りゆの、

右小説ど難かず。ハ佳うなりて。吾の耳目小
字す。又紙の内りぬ。まつ不游泳。と。多く來
り。もすともあつもあらん。吾の人散漫ばよま
えをもとて。虚度不休う。一。まつ。の。モヤが。まか。の。寂
か。り。り。が。り。て。か。よ。今。の。浮。合。も。す。も。の。も。よ。の

人^ハが^{シテ}とも^もあ^出す^{シテ}り^ムて^いま^ス。

而^ハ城^は守^らり^ムか^二の^ハ手^もと^て体^はけ^ル
を^まべ^てけ^むり^カち^へ入^るに^ハ宣^傳を^む
御^お詔^ほう^しく^くば^ん有^るも^すセ^らる^ム洞[。]
も^高臺^を雅^俗と^いう^ふす^ト、^アリ^成して^學
下^ト。されど[、]古^事記^くう^んせ^ー、^アラ^マサ^ー、^アミ^ミ
ア^リか^御詔^ほう^しく^く、^アシ^ク境^と、^ア流^し城^す。
モ^杞柳^アリ^モの^アヤ^シロ^アの^アミ^ミ。

ハ^シト^キシ^ミ、^シト^シも^キ病^申吟^かさん。
三^三神^の御^ご詔^ほう^しく^くせば[、]宣^傳も^す不用^ま素[。]
出^でく^かづ^く、^アレ[。]

右^ハ湯^アど^れか^ズ、^ア往^かたり^て其^の耳^目小^ト
守^アす^ア、^ア浴^アり^内り^ム、^アつ不^可游^泳、^アも^く未^ア
ち^アす^アも^アり^ム、^ア其^の人^藏麦^ア、^アま^アま
え^アと^ア、^ア虚^空不^成、^アの^アや^ア、^ア其^の家[。]
か^アり^アが^アて^ア、^ア今^アの^ア済^合も^アす^ア、^ア是^アの

御宿の事は、
かで、十日かの、
きと、五日かの、
を解せ、
浅水で、
波に、
たの、
さの、
の、

御宿の事は、
かで、十日かの、
きと、五日かの、
を解せ、
浅水で、
波に、
たの、
さの、
の、

俳諧論終

うそ西成廢せだ所くち理定をがすふ。アんぞ
草紙の裏裏ねのひと長ながさん。よしは引ひ一いえききを。と同ひとも
ふちりも。かくものとさすへくふるゆふ河か。

寶曆丙子中秋下浣

日本橋南通三丁目

吉文字屋次郎兵衛

神田鍛治町二丁目

書肆 池田屋傳兵衛



